私にとっての教育 –教育と研究, 産学連携–

Education, In My Mind

– Education, Research and Collaboration between Industry and Academia –

齊 藤 博 嗣^{※1}
Hiroshi SAITO

わたしはこれまで、ポスドク、研究所専属研究員および講師の立場で、多忙な教授の研究室に配属された学生に研究指導を行う機会を数多く得ました。学生からすれば直接的な指導教員ではありませんでしたので、研究室の兄貴分といった感覚であったかもしれませんが、学部4年生は1年間を、修士まで進学する学生は3年間を共に研究室で過ごし、研究活動を行う上で基礎となる学問の指導や、共に実験を行い、時には研究室旅行などで時間を共にし、研究活動を通じた物事考え方とそれに伴う視野を持てるよう、指導を行ってきたと自負しています。

これまでの学生とのふれあいを通じて、私にとっての教育とは何かを考えると、物事を考える上で手助けとなる知識の引き出しを与えることと、さらには基礎となる知識の上に立って物事を考える能力を導くことであると思います。前者は学習によって習得できる知識であり、後者は本当の意味での学力ということができるかもしれません。大学の研究においては、学部4年時に研究室に配属された学生が、それまでの答えのある学習から未知なるものを明らかにする研究を行う上で、様々な知識や知恵が必要になりますが、その基礎となるものは、それまでに学んだ知識に他なりません。学生が社会人になったときにも、全く同じことが言えると思いますし、あるいはさらに知識の幅が必要になるかもしれません。そのような基礎となる知識の上に立ち、学んだ知識を実際に利用する機会を持たせて、知識を知恵にする能力、学力を培うことが、教育の重要な役割であると思います。近年、実践教育が多く大学の大学で取り入れられている背景には、このような観点での教育が重視されつつあるためであろうと思います。学生に知識と知恵を与え、より広い視野で物事を考える能力を与えることが、教育のゴールの一つではないかと思っています。

一方で、特に高等教育においては、学生と教員の双

方向的な学習効果があると思います。つまり、教育を受ける学生が学ぶのと同時に、教える側の教員も教えるという行為により、一層の理解を深めることができ、またその努力を継続することで、学生と教員の双方が教育の恩恵を受けることができるように思います。学生の理解には教員の深い理解が欠かせず、その意味でも教員としての努力とそれに伴う理解は、教育における非常に重要な要素であると思います。本学においても、学生による大学講義に対するフィードバックが、教育システムの改善に大きな役割を担っています。仕組みとしてのフィードバックの有無に関わらず、教育者の手応えとして、学生が学習内容をどの程度理解しているかについては常に気になる所でもあります。教えることは学ぶこととよく言いますが、教えることによってより深い理解を得られることは、個人的にも幾度と無く経験しました。教育の双方向的効果は、教育に携わる者の特権の一つではないかと思っています。

また、社会的役割として大学に求められる産学連携を推進する上で、社会人に対する教育は今後より重要度を増していくのではないかと考えられます。近年、地域クラスター型の産学官連携プロジェクトが盛んに行われていますが、こういった活動への参加をきっかけに事業展開を図る企業も少なくありません。技術的なセミナーなどを通じて社会人に対する教育を行ない、あるいはそこから企業との共同研究へとつながっていくケースが、大学・企業双方にとって望ましい関係であると思います。本学のある北陸地域では繊維・繊維が地場産業として盛んですが、事業展開を図るために、同じく繊維を用いた複合材料分野に打って出るケースが近年特に多く見られます。幸いにも、私はこのような地元企業との共同研究・委託研究に多数関わることができましたので、これらの経験を活かし、企業との連携を通じた教育にも携わりたいと思います。

2012年1月20日受付

※1 初級教育士（工学・技術）

金沢工業大学